



Contents

特集 令和5年度 全学FDシンポジウム開催
ティーチング・ポートフォリオの活用を考える 2

連載 部科校における学習支援等の事例紹介 4

第16回 [国際関係学部] 新任教員を対象にした授業研究の実施

連載 授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供

第17回 [スポーツ科学部] スポーツ科学部で学ぶ競技スポーツの多様な価値

COVER PHOTO

生物資源科学部動物学科1年生の「動物学基礎実験Ⅰ」の授業風景です。この日は、貝を解剖して、実体顕微鏡で観察しています。(担当教員 生物資源科学部 岩佐宏宏教授, 中井静子専任講師)

特集 令和5年度 全学FDシンポジウム開催 ティーチング・ポートフォリオの活用を考える

本学は、教員自身の自己点検、評価を行う有効な手段としてティーチング・ポートフォリオ（以下、TP）の全学導入を検討中です。TPの目的や意義について教職員と共有するため、2023年10月14日にシンポジウムを開催しました。

第1部 講演 ティーチング・ポートフォリオとは

TP作成により、教育業績を可視化し、 教育改善や組織と自身の理念を確認

東京大学 大学総合教育研究センター 副センター長 栗田佳代子氏

TPとは、自らの教育活動について振り返り、その記述を根拠資料によって裏付けて厳選された記録のことです。TPはカナダで生まれ、北米で教育業績評価手法として定着しています。栗田氏は「教育者が成長するには、経験と省察が必要であり、TPはそこで役割を果たす」と解説しました。

TPは教育改善と教育業績の可視化が目的であり、責任、

理念、方針・方法、成果・評価、改善・努力、目標の6つから構成されると説明。中でも栗田氏は、「理念」が重要だとし、「TP作成により、これまでの教育活動を棚卸しすると、教員としてどうあるべきか、自身のあり方を確認することができる。そのため、TPを教育改善に繋げるには、形ばかりのものではなく、自身の理念を紡ぎだすような内容を記述することが大切。また、組織にとっても、組織の理念と教員の理念がどう位置づくのかを問うチャンスでもある」と述べました。



第1部 講演 ティーチング・ポートフォリオ活用事例

①東京都市大学版TPの導入と展開

東京都市大学 教育開発機構 FD推進センター長 伊藤通子氏

全学的に利用してもらうため、フォーマットから作成

東京都市大学では、2020年10月からTP導入に取り組んでいます。FD推進センター内にワーキンググループを結成し、同大学版TPのフォーマットを作成するために、試験的に作成ワークショップ（以下、WS）を実施。参加教員に意見をもらい、試作を繰り返し、教員に負担が少ない形式に仕上げました。TPを全学に浸透させるため、作成WSや活用WSを実施。伊藤氏は「WSに対話的ピアレビューを行ったところ好評だった。TP作成は現在希望制だが、多くの教員に取り組んでもらう施策を検討中」と語りました。



パネルディスカッション形式での質疑応答

3人の講演後、質疑応答が行われました。「TP導入のメリットは？」という質問に栗田氏は、「TP作成は教育改善に役立つ

②生産工学部版TPの導入と活用

日本大学FD推進センター副センター長・生産工学部教授 藤井孝宜

教育業績評価から展開し、2015年からTP作成を義務化

生産工学部では、優れた教員の教育事例を共有したいと考え、2007年度から教育貢献賞を実施していました。選考は、教員が記入する自己点検表によって行いますが、教員の約半数がそれを提出していませんでした。教育の自己点検活動はFD活動の基本と考え、2015年7月、自己点検表を兼ねたTP作成を全教員に義務化。藤井教授は「TPを作成し、自身の教育を振り返ることで、学生による授業評価で授業満足度が上がるという効果が出ている。今後も新任教員へのTP作成の研修などを行い、教育力向上を目指したい」と話しました。



つだけでなく、教員の顔が明るくなり、QOLが向上するといった精神的な効果もある」と述べました。そのほか、参加者からTPの効果検証や作成に関する負担など実践に関する質問が多く上がり、盛況のうちに第1部は終了しました。

第2部 ティーチング・ポートフォリオ・チャート作成ワークショップ

自らの教育活動を見直すきっかけとしてTPチャートを作成

第2部では、栗田氏の進行により、参加教員がTPチャート作成から見直しまでの一連の作業を行いました。TPチャートは、TP作成を体験するツールとして開発されたものです。TPは作成に2日半かかりますが、分量がA3判1枚のTPチャートは、最短2時間で作成可能です。作成の目的は、参加教員が自分の教育活動を俯瞰し、自身の教育の理念・信念を明らかにして、授業改善のきっかけをつかむこと。参加教員は、下記の流れで自分の教育活動を整理していきました。TPチャートはデジタル版も用意されていますが、栗田氏は「実際に手で紙に書き込むことで、思考の流れがスムーズになる効果がある」と説明しました。

ワークショップの流れ

- ① ワークショップ導入
- ② TPチャートを作成①
(責任/改善・努力等を記入)
- ③ 隣の教員とシェア
- ④ TPチャートを作成②
(方針・方法/理念を記入)
- ⑤ 隣の教員とシェア
- ⑥ TPチャートを作成③
(エビデンスを記入)
- ⑦ 4人組になってシェア
- ⑧ TPチャートを作成④
(短期長期目標/感想を記入)
- ⑨ 隣の教員とシェア、解説



▲これまでの自分の教育活動を振り返り、項目ごとに記入。

▼黄色の付せんはこれまでのこと、桃色には個人エピソードを記入。



◀教育活動のエビデンスを確認する3回目のシェアは、4人組で行った。

他学部の教員とのシェアにより、新たな気づきを得る

作成の過程では、他の教員とのシェアが4回行われました。普段は交流のない教員と対話ができるよう、席順は学問系統の異なる学部の組み合わせで設定され、シェアは「敬意を持って、忌憚なく、建設的に」という「3K」のルールで実施されました。栗田氏からは、「聴き手は、相手が振り返りを深められるようなフィードバックを心がけて」とアドバイスがあり、シェアから新たな気づきを得た教員は、チャートを都度修正していました。



▲東京都市大学の教員も参加。伊藤氏も交え、議論を交わす本学教員。

「TPは個人的なものだが、教員集団全体を俯瞰してみると、ディプロマ・ポリシーの実効性の確認もできる。また、カリキュラムの質を高めるためには、各教員のTPを毎年更新することが望ましい」と栗田氏。第1部講演後には、TP作成による業務負担への質問が出ましたが、実際にTPチャートを作成し始めると、参加教員の熱気は高まり、休憩中も議論を続ける姿が多く見られました。

参加した教員の声



授業改善は、自分でやり方を見直すだけでは限界があります。FD活動を通して、教員が授業改善について考える機会を設ければ、TPチャートへの記載内容が増えると思いました。



TPチャートを教員個人の自己省察だけで完結させないためには、大学全体として導入する目的をもっと検討し、周知する必要があると感じました。



大学の教育理念の達成に向けて自分が何をすべきか理解不足の教員が、適切な役割を果たせるようになるためにも、TPチャートの全学導入は重要な施策になると感じました。

閉会挨拶 TP作成は、これから始まる教育改善の第一歩となる



日本大学FD推進センター長・松戸歯学部教授
河相安彦

ある報告によれば、大学教員の95%は「協調性や統率力において他の教員よりも自分が上回っている」という教授錯覚に陥って

いるそうです。今回のように、他の教員と自分の考えを共有することは、教授錯覚にブレーキをかける効果があると感じました。TPチャート作成により、授業改善のヒントなど何らかの気づきを得たと思います。TP作成をこれから始まる本学の教育改善の一歩だと認識していただければ幸いです。

連載

部科校における学習支援等の事例紹介

第16回 [国際関係学部] 新任教員を対象にした授業研究の実施

国際関係学部では、学生の授業への満足度向上を図ることを目的に、令和4年度より3年ぶりに授業研究を行っています。

新任教員には①授業方法の改善などを検討してもらうために担当する授業科目に関連する他の教員の授業や興味のある授業の参観、②新任教員自身の担当する授業にFD委員の参観の受け入れの2点について依頼し、参加する側と参加される側の双方型で授業研究を実施しています。

授業研究は、参観だけでは十分な目的を果たすことが難しいため、研

究報告書の提出も依頼。新任教員は、自ら希望した授業への参観後に提出し、新任教員の授業を参観したFD委員も授業参観後に報告書を作成していただきます。

新任教員が提出する研究報告書には4つの項目(教材、学習方法、授業展開、授業内容)で作成してもらいます。一方、新任教員の授業を参観したFD委員からは授業評価アンケート項目に準拠した5段階評価と自由記述、今後の授業へのアドバイス等の記載内容を含め研究報告書を作成していただきます。そして新任

教員へのフィードバックを行い、今後の授業改善に向けて役立てていただきます。

授業研究は、新任教員だけでなくベテラン教員にも参観をされる機会を設けていることから、経験豊かな教員にとっても自身の授業方法を顧みる良い取り組みでもあります。令和5年度も11月~12月にかけて新任教員4名の授業参観を実施します。この取り組みを通じて、学生に対する更なる教育の質の向上と充実を図っていく予定です。

(国際関係学部教授 蓼沼智行)

連載

授業改善のための
ティーチングティップスの収集と情報提供

第17回 [スポーツ科学部] スポーツ科学部で学ぶ競技スポーツの多様な価値

スポーツ科学部では養成したい人材像として「反省的实践家」を掲げています。この反省的实践家は、様々な現場で活動を行いながら同時に省察を行い、課題を発見・分析し、課題解決に導く能力を有する人材を指します。このような人材の養成を目指し、能力を開発するために必要な知識、技能の修得を特に実習系、演習系科目の中で展開しています。

その実習・演習系科目の中でも特徴的な科目が「スポーツインターンシップ」です。スポーツは「アスリートのためのもの」という概念が学生

の中には一部存在しています。これは高校までスポーツを実践してきたが、競技者以外の別の視点から捉えるという機会に恵まれなかったことに起因すると考えられます。そのような一方向からの視点ではスポーツにある多様性を理解することはできず、反省的实践の妨げになります。同授業では競技をする人、見る人、コーチ、トレーナーなど直接的にサポートする人ではなく、あえてその裏側にいて関係性を構築したり、スポーツの振興を図ったりする人や企業に着目し、その現場にある様々な



仕事を学び、学生自身のスポーツに対する価値観を多様にすることを目指しています。スポーツを複数の視点から捉えることにより学生の学びの幅が広がり、キャリア形成の支援にもつながっています。(スポーツ科学部准教授 本道慎吾)

※本ニューズレターに記載した資格・学年等は、令和5(2023)年12月現在のものです。

日本大学 FD NEWSLETTER 第24号

発行日: 令和6(2024)年1月15日(年2回発行)

発行者: 日本大学FD推進センター センター長 河相 安彦

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24 電話:03-5275-8314 FAX:03-5275-8315

e-mail:adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp https://www.nihon-u.ac.jp/fd-center/

所管部署: 日本大学 本部 学務部学務課 企画・編集: 日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

「日本大学 FD NEWSLETTER」に関する御意見や御感想などがありましたら、学務部学務課(adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp)へお寄せください。

本ニューズレターに掲載した文章、写真等の無断転載・複製を禁じます。 Copyright(C)Nihon University 2024 All Rights Reserved.

